

耳で聴く落語・文字で読む落語

< 1 > はじめに

子どもの頃にラジオから流れて来る落語が「落語との接触」の始まりだった。ごく一握りの方々が寄席を体験できたものの、一般大衆にとって落語とは「ラジオで聴くもの」だった。耳をそばだててせっかくの面白い一瞬を聴きもらすまいと「聴くことに集中」したものだ。まさに、耳で聴き、自ら仮想空間を脳裏に描きながら楽しむのが落語だった。

後にテレビが登場して映像として落語を見るようになった。映像で流れる落語は多くの観客に「語りの面白さ」の他に「しぐさの面白さ」までを伝えてくれた。しかし、その結果として「話芸」から「顔芸」や「体芸」に走る芸人が出てくることにもなった。

そして時を経て、生で本物を見ることの方が多くなった今、「高座で演じる噺家が描く仮想空間の映像」を客席で見る人は、それぞれ独自に「受け取った仮想空間の映像を再現」して楽しむ。そこには見事な「噺家と観客との共創」の世界があり、「ものすごい芸術」なのだと思うようになってきた。

耳で聴いて落語を楽しんだ頃に、耳で聴いて面白いばかりでなく、その意味に興味を感じた噺がいくつかあった。長々とまくし立てるセリフが面白さの中心になっているネタは、老若男女隔てなく楽しむことができ、一家の食後の団欒には最適のものだった。そして何回か耳にするうちに暗記してしまうが、小学生の頭では意味は殆どわからないものが多かった。意味がわからなくても笑える、それが落語だった。

やがて歳を重ねて、意味がわかるともっと面白いだらうと思ったり、「この言葉はどんな字を書くのだろうか」と資料を調べてみることにまで発展したネタがいくつかあった。今ではインターネットで調べれば正確さはともかくとしてかなりの情報を調べ上げることができるが、昔はかなりの努力をしないと疑問や興味を解決することは難しかった。苦労して調べて見たらこんな内容・こんな意味の言葉だったとわかり、驚いたり感心したり、がっかりしたりしたものだ。

* 註：落語は、師匠から弟子に語り継がれ、それぞれの時代背景やそれぞれの芸人の思う所を反映して、少しずつ変化をしながら生き続けているので、同じネタの同じ場面でも登場人物のセリフには演じる噺家により微妙な違いがある。従って以下に示す「文字に書いた落語の一節」も、演者やその系列によって異なるものなのでご容赦下さい。

* 参考にした文献：「落語手帖」（講談社α文庫）、「落語事典」（東大落語会編）

< 2 > 寿限無（じゅげむ）

この噺は、知らない人はいないぐらいに一般化しており、小学校の授業にも登場するいくつかの落語の内の一ひとつに数えられる。

何年か前のことになるが、千葉市内の特別支援学校の先生から「国語の授業の一環として『皆で寿限無を暗誦しよう』というテーマに挑んでいる。障害のある子ども達が皆で分割分担して暗誦の発表会をするが、その発表会の時に子どもたちに『本物の落語 寿限無』を見せてやりたいので力を貸していただけませんか」との要請が入ってきた。社会人落語活動を40年あまり続けている友人を伴って学校を訪問して、発表会に参加した。「これからじゅげむのはっぴょうをします」と最初の子どもが挨拶をすると、次の子どもから順に落語の語りが進められていく。脚本は子ども向けに省略されたものであり、ひとりひとりが担当するフレーズは少しずつではあるが、それがリレーされてやがて「落ち」にまで辿りつく。最後のフレーズが終わった時には子ども達の表情に「やり遂げた喜び」が浮き出て来る。その後で、「本当の寿限無」を披露して、皆で記念写真を撮って発表会は終了、という素晴らしい体験をしたことがあった。

この噺は前座の口馴らしのネタのひとつになっているらしい。

いまさら解説は不要なネタではあるが、生まれてきた子どもに何か良い名前を付けてやりたいと思った親がとんでもない名前を選んでしまうという噺である。「めでたい名前を」「力強い名前を」と頭を悩ます親心を

落語にしたものだが、まさかの出来事が起きてしまう。

噺の中でも説明が加えられているが、めでたい言葉や長生き・長続きを意味する言葉を連ねたという長い長い名前を、漢字で書いて見るといくらか理解が深まり、面白さも増してくる。

「寿限無、寿限無、五劫のすり切れ（ず）、海砂利水魚の水行末、雲来末、風来末 食う寝る処に住む処
藪ら小路ぶら小路 パイポパイポ、パイポのシューリンガン シューリンガンのゲーリンダイ、
ゲーリンダイのポンポコナー、ポンポコナーのポンポコピー 長久命の長助」

耳慣れない言葉「五劫」が気になる人が多い。「劫」はインド哲学で言う「宇宙論的な時間の長さ」で、つまり「五劫のすり切れ」または「五劫のすりきれず」は、「無限の時間の長さを生き続ける」ことを意味するということらしい。

<3> 金明竹（きんめいちく）

落語には欠かすことができない名脇役の与太郎が旦那の留守に道具屋の店番をすることになる。そこへ上方言葉のお客が来て色々喋って行くが、江戸っ子が聞いてもさっぱりわからない言葉でしかも早口でまくし立てられて困ってしまう。途中からおかみさんが加わるが、やはりわからない。さて困ったことに……。江戸言葉と上方言葉の違いをベースにして、江戸っ子が持つ「他言語への嘲笑感」を加えている。この噺も前座の口馴らしのネタのひとつに数えられるが、上方言葉を必要以上に早口で喋りまくって笑いを取ろうとする落語家が多い。上方言葉を早口で喋られたら江戸っ子には聴き取れないということだけでおかしさを構成したのではこの噺の面白さが消えてしまうので、適度な早さに留めて聴き手にセリフの意味を少しづつ感じさせ、印象に残す所がこの噺の勘所であると思う。

この上方言葉がまくしたてるセリフの中には、単なる滑稽以外に文化的に歴史的に意味のある言葉が数多く登場し、聴き手の耳に残る部分が多い。かといって、聴き惚れて笑い転げている内に内容はすっかり忘れてしまい、滑稽だけが後に残る。このセリフも文字に書かれたもので読んでみるとなかなか奥が深い。

「わて中橋の加賀屋佐吉方から参じました。先度仲買の弥一が取り次ぎました道具七品のうち……」と始まり、この加賀屋佐吉の代理人として来た男は「弥一が取り次いだという七つの品」について伝言を頼むのだが……。与太郎がボカンとして目を丸くして聴いている様子を想像できるから面白い。

「七品のうち、祐乗・光乗・宗乗三作の三所物、ならびに備前長船の則光、四分一ごしらえ横谷宗珉小柄付きの脇差、あの柄前は旦那はんが古鉄刀木（ふるたがや）と言やはってたが埋もれ木じゃそうにな、木いが違おとりますさかい、念のためちょっとおことわり申します。次はのんこの茶碗、黄檗山金明竹、寸胴の花活け、『古池や蛙とびこむ水の音』あれは風羅坊正筆の掛け物で、沢庵・木庵・隠元禅師張り交ぜの小屏風、あの屏風はなあもし、わての旦那の檀那寺が兵庫におまして、この兵庫の坊主の好みまする屏風じゃよって兵庫へやり、兵庫の坊主の屏風にいたしますとなあ、かようにお言付け願います」

骨董品を取り扱う道具屋のセリフゆえに専門用語が立て続けに出て来て、八五郎でなくても理解に苦しむ。

「祐乗・光乗・宗乗」は、刀剣類の装飾金工家後藤祐乗・光乗・宗乗。

「三所物」は日本刀の小柄（こづか）・筭（こうがい）・目貫（めぬき）を言う。この後のセリフにも繋がるが、日本刀の各部位の名称が続々と登場し、予備知識がないととても理解できない。

「四分一ごしらえ」とは、銀と銅の合金の成分割合を示すもので「銀が 25%銅が 75%」のものを言う。

「小柄」「脇差」「柄前」と刀に関する専門用語が続き、「古鉄刀木（ふるたがや）」で驚いてしまう。

「鉄刀木」は植物の名前で、「タガヤサン」という熱帯産の植物。つまりこの一節は「刀の柄の部分の素材の説明を」している。

そして刀の話が終わると次は茶碗の話に移る。「のんこの茶碗」の「のんこ」は陶芸家の楽道入の別名で、正しくは「のんこう」らしい。

「黄檗山金明竹、寸胴の花活け」とは、黄檗山の金明竹（マダケの一種で独特の色と模様がついた竹）を使って作った寸胴の花活けを意味する。

そして、この落語の「落ち」に向かって重要な働きをする一節が「古池や蛙とびこむ水の音……」。

松尾芭蕉（別名：風羅坊）直筆の掛け物というわかりやすい品で聴き手に強く印象付ける。

<4> 垂乳根 (たらちね)

江戸の落語では「たらちね (垂乳根)、上方落語では「延陽伯」という。余談になるが、この落語の中には「たらちね」という言葉は一度だけしか出てこないし、登場人物の間のやりとりの中で主要な位置を占めている言葉でもない。にもかかわらずネタ (題名) として君臨しているという不思議な落語である。

独身の八五郎に大家さんから縁談話が持ち込まれた。相手の女性、器量は 10 人並み以上だが言葉が丁寧すぎるのが欠点だと言う。大家さんの話では、道ですれ違った時にこんな挨拶をされたという。

「今朝 (こんちょう) は怒風 (どふう) 激しゅうして小砂眼入 (しょうしゃがんにゅう) し歩行成り難し」話はまとまり、すぐに嫁入りとなったが……。

八五郎が花嫁に名を聞くと、こんな返事が返ってきた。

「自らことの姓名は、父は元京都の産にして姓は安藤名は慶三、あざ名は五光、母は千代女と申せしがわが母三十三歳の折、ある夜丹頂の鶴を夢見てはらめるが故に、たらちねの胎内を出でし時は鶴女と申せしが、それは幼名、成長ののちこれをあらため清女と申しはべるなり」

まったく理解できない八五郎は、この長いセリフすべてが名前だと思い込んでしまう。そして一夜明けた朝、飯を炊こうとしたが米がどこにしまってあるかわからない新妻は、夫にこう尋ねる。

「あーらわが君、白米 (しらげ) のありかはいずこにや？」

そして、味噌汁の具がないので門前に売りに来た野菜売りを呼びとめて買い物をすることになるのだが、これまたひと騒動。ようやく朝食の支度が終わると、まだ寢床にいる八五郎を起こしにかかる。

「あーらわが君、日も東天に出まさば、お起きになつてうがい手水に身を浄め、神前に御灯明 (みあかし) をささげられ、看経ののち、御飯召し上がってしかるべく、恐惶謹言」

この新妻の言葉に返す八五郎のセリフが「落ち」となるのだが……。

「飯食うのが恐惶謹言か？ じゃ酒飲んだら、『依つて (酔つて) くだんのごとし』か」

この「落ち」は平成の世となっても未だに変わらず、会場のお客さんはドツと笑って拍手をして終わる。しかしながら冷静に考えてみると、今や「恐惶謹言」という言葉が理解できる観客は一割いるだろうか。

「おそれ入つて、謹んで物申し上げる」などと手紙の結びに書く人はもはや存在しないだろうと思う。恐惶謹言という言葉を使うかどうか以前の問題として、メールと称する新時代の手法が登場したことにより手紙すら書くことがなくなってしまった。観客はそれでも笑えるのはなぜだろうかと、この噺を聞くと気になってしまう。

<5> 運廻し (うんまわし)

大家さんが木の芽田楽をごちそうしてくれるという誘いに乗って、長屋の連中が集まって来る。大家さんからは「ん」の字を含む言葉を言ったら、その数だけ田楽を食わしてやるぞと課題が投げかけられる。最初の男は「よう言わん」と言つて田楽一本を手に入れる。要領がわかってきた者があとに続く

「なんきんまめ」で二本、「にんじんだいこん」で三本、「みかんきんかんこちやすかん」で四本とどんどん増えて行く。ここまで来てもまだ容量がわからない者がいて話を面白くしてくれる。「みかんきんかん」が出てたのを受けて「なすびきゅうりとまと」と言つて失笑を買う。「ん」がないことを指摘されると窮余の一策として「なすびんきゅうりんとまとん」と返す。

長屋の住人も少しずつ頭が回るようになってきて、やがて巧者が現れるようになって来る。

「まんねんぺん (万年ペン)」と言つて四本を要求するが、それは「インク」が付いているからだと言う。

「いとさんぼんさんあたまにてんかふん」、「てんてんてんまのてんじんさん」とどんどん高度化し、「ほんざんぼんさんかんばんがん」(本山の坊さんが歩いていたら頭を看板にぶつけてガン) と凝りに凝った逸作が登場するようになる。そして遂に物凄い作品が出て来るが、ここまでの流れとテンポが絶妙だ。

「せんねんしんぜんえんのもんぜんげんかんばんにんげんはんめんはんしん、きんかんばんぎんかんばん、きんかんばんこんぼんまんきんたん、ぎんかんばんこんぼんはんごんたん、ひょうたんかんばん、きゅうてん」(先年、神前苑の門前玄関番、人間半面半身、金看板銀看板、金看板根本万金丹、銀看板根本反魂丹、瓢箪看板、灸点)

と二度言って多量の田楽を手に入れる。

落ちに向かってまだ続くのだが、ここまでのくだりが一番面白い。この噺は「田楽喰い」とも言われており、「寄合酒」の中の一場面だったらしいが、最近の「寄合酒」ではこの場面まではやられないし、「田楽喰い」もあまり耳にしない。

東京で活躍した上方落語の二代目桂小南の「運廻し」と「いかげや」のカセットテープが手元にあった。どちらの噺も上方言葉の軽妙な語り口に引きこまれて、何度聞いても笑える。特に「いかげや」のうなぎ屋と子どものやりとりには言葉では表現できない「二代目桂小南ならではの面白さ」がある。

これは絶対保存しておかねばと思い、パソコンを通してCDに変換して「永久保存」と称して書架に収めた。落語は面白い、しかも面白いばかりでなくためになる。

以上